

浦河町立萩伏中学校

実施日：平成23年10月19日（水）10:30～11:20

講師：三船 志代子氏（択捉島出身）

ただいま先生からご紹介のありました、三船志代子と申します。

私は北方四島で一番北にあります択捉島、その択捉島でも更に北にある「薬取村（しべとろむら）」という小さな村で生まれました。薬取村の「薬取」とはアイヌ語で「大きな川のあるところ」という意味だそうです。

本日は、私の生まれた薬取村がどんなところだったのか、また人々がどんな暮らしをしていたのか、戦争が終わってからロシア兵がやってくるのですが、その時の様子、また強制送還により島から引き揚げて来た時の様子などをお話します。

まず始めに、私が生まれた「薬取村」がどんなところだったのかお話しいたします。今は「薬取」に行くには根室の港から船で行きます。ロシアのハンターに守られながら上陸するのですが、現在の村はすっかり自然に返っており、無人の状態、ヒグマの住み家となっています。学校の門やお寺の境内にあった松の木、それから神社の土台などが残っています。また、お墓から墓石が捨てられ1カ所に集められていました。これを見ると、昔、ここに人が住んでいたのが分かります。

ここに「ばあちゃんのしべとろ」という絵本があります。この絵本は、今から10年前、子供達にもっと島の事を知ってもらいたく、根室支庁が一般公募で募集し、最優秀賞に選ばれた絵本です。作者は私、「三船志代子」。素敵な絵を書いていただいたのは、娘の同級生の「はやしまきこさん」です。ここで読んでみますので、薬取はどんなところだったのか、皆さん想像しながら聞いてください。

（ここで絵本の朗読）

「ばあちゃんのしべとろ」

ばあちゃんはね北方領土からの引き揚げ者なんだよ

「北方領土」、ここにはね日本の国とロシアの国のとても難しい問題があるんだよ

根室半島からカムチャッカの間に島がいくつもあるよね

根室に一番近いところにある四つの島

歯舞諸島・色丹島・国後島・択捉島

この北方四島を「北方領土」と呼ぶんだよ

北方領土は日本の領土なんだよ

ところがね昭和20年8月15日に戦争が終わってから

ソ連軍が北方四島を占領してしまったんだよ

島に住んでいた日本人はそこに住めなくなってね

むりやり（強制的に）島から引き揚げることになったんだよ

その時ばあちゃんは小学生3年生だったんだよ

ばあちゃんはね択捉島の薬取で生まれたの

島の一番北にある五百人くらいの小さな村だったよ

とてもいいところだったよ
村にはね役場、郵便局、小学校があったよ
立派なお寺や神社もあったよ
駅通（えきてい）、公会堂、お店、床屋さんもあってねにぎわっていたんだよ
お寺に小さなお堂があってお地藏様が入っていたの
亡くなった子どもの着物をかけてもらって
いつも花がそえられていたよ
そんな優しい村だったよ
島の周りの海はね
世界の三大漁場の一つなんだよ
だからねいろんな魚がたくさんとれるんだよ
タラ、サケ、マス、サンマ、カニ、コンブやノリもクジラもとっていたんだって
流氷が消えて魚がとれるようになるとね
遠くからたくさんの人たちが出稼ぎに来るので漁場や村がいっそう賑わったんだって
魚がたくさんとれるとモッコをかついだ大人たちが一生懸命働いていたよ
船着き場から大きな倉庫まで列をつくって魚を運んでいたよ
雪解けが始まるころね
浜に行ってみると大きな氷の塊が残っていてね海藻なんかついているの
ホオズキのようなものもあったよ
それをひろって口の中に入れブーブー鳴らして遊んだよ
街から少しはなれたところにトッカリモイという岩場があったの
そこにはね大きい花咲ガニがいっぱいいたよ
夏にはそのカニをつかまえて遊ぶのとってもおいしかったよ
つかまえたカニは潮だまりにかくしておくの
でも潮が満ちてくるとみんな逃げてしまうの
逃げられても逃げられてもとっても楽しかったよ
薬取川にはね大きな橋がかかっていたよ
孵化場に行く人も子どもの遠足のときもみんな通ったよ
川の色が変わるほどたくさん魚がのぼってきてね
お兄さんたちはねテンテンという道具を作って魚をとって遊んでいたよ
川尻ではね潮が引くと川底から大きな石がゴロゴロと出てきて
小さい子どもでも向こう岸までピョンピョン渡れたよ
でもね満潮になると深くなって石は見えなくなり流も速くなるので渡れなくなるんだよ
山の雪が溶けウグイスやカッコウが鳴き出すと
桜の花が咲き野の花もつぎつぎと咲くんだよ
タンポポ、カッコウバナ、クロユリ、アヤメ、ナデシコ…いっぱい咲いていたよ
大きなフキもあったよ
子どもより大きい大人お背丈くらいのフキ
母さんが大きな鍋で茹でていたよ
やわらかくておいしいフキだったよ

夏の終わりころね

丘に登るとフレップの実がたくさんあったの
赤紫色した小さい実だけどとってもおいしかったよ
唇が紫色になるまで食べたんだよ
その甘酸っぱい味は今でも忘れられないね
冬はね雪がたくさん降るんだよ
家の中ではお手玉、竹わり、折り紙、人形遊び
外では雪合戦をしたりスキーで遊びみんな元気だったよ
真冬になると海いっぱい流氷がやって来るの
遠くの氷の上にはアザラシが乗っていたよ
寒そうで海に落ちたらかわいそうと心配して見ていたよ
海の向こうに水平線が続いているの
空と海がピッタリくっついて見えたよ
そこにね夕日が静かに沈んでいくの
ずっと見ていると船も沈んでいくの怖かった本当に怖かったよ
地球が丸いということその時はまだ知らなかったんだよ
そしてどうしてもこの島を出て行かなきゃならない日がやって来ることもね
ばあちゃんはねようやく懐かしい薬取へ行ってくれたよ
「自由訪問」というのに参加してね
ばあちゃんの故郷なのに、日本の島なのに、行きたい時にいつでも行けないんだよ
今の薬取はね住んでいた家や学校や昔の建物は全部なくなっていたよ
あの大きな橋もなくなっていたよ
街はね砂地になってハマナスに覆われていたよ
でもね鳥は昔と同じように鳴いて花も咲いていたよ
波のない海は鏡のように春の景色を静かに写していたよ
やっぱり薬取はいい所だったよ
ばあちゃんの薬取はいい所だったよ

(おわり)

薬取はどういうところか想像できました？

この絵本は私の幼かった頃の記憶、また段々薄れていく記憶を綴ったものです。この絵本が最優秀賞に選ばれてから、当時の村の様子に間違いがないか心配になりましたけど、先輩にあたる方々に確認したところ、薬取の事が良く書かれていると認めてもらいました。

それでは薬取では、人々がどんな暮らしをしていたのかお話しします。

まず、魚はたくさん獲れていたそうです。世界の三大漁場と言われていましたから。

1800年代、今から200年くらい前の幕府、今で言う政府の命令で「高田屋嘉兵衛（たかだやかへい）」や「近藤重蔵（こんどうじゅうぞう）」などが択捉島に漁場を17箇所開設しました。その時、高田屋嘉兵衛は各漁場にお地蔵さんを安置し、豊漁をお願いしたそうです。薬取もそのうちの一つです。この絵本に出てき

た時のお地藏さんは、その時のお地藏さんです。村の人々はこの漁場で働きました。魚の獲れる時期には多くの出稼ぎの人が来ました。出稼ぎに来た多くの人々は東北地方からが多かったそうです。

冬が来るころには漁を終え切り上げになると、出稼ぎの人々はそれぞれ地元に戻ります。冬になれば村は静かになり寂しくなります。しかし、村では青年団から子どもまで、村の主な人で「歌舞伎」を上演したそうです。会場は公会堂、今でいう公民館に、村人はたくさんのご馳走を持ち込んだそうです。村長さんはいつも主演、私の父は女方を務めていました。これらの様子は、父が島から持って来た古いアルバムの中の写真に写っていました。薬取村は小さい村ですが、豊かな暮らしが出来ていました。

幼かった私が島で一番楽しかったことは、川や海で遊んだ事です。綺麗な砂浜が続く浅い海には小さいカレイの子どもがたくさんいます。砂の中に体をかくして目だけ出しているのですぐ分かります。私たち小さい子どもたちはそれを足で踏んだり、手ぬぐいを広げてすくったりして遊びます。でもカレイの子どもは素早く、砂を撒き散らし逃げ回り、私たち子どもには捕まえることはできませんでした。絵本にも書きましたが、岩場に行くと花咲ガニがいっぱいいて、これを捕まえる事がとっても楽しかったです。

当時の村の暮らしは、今から65年前の話ですが、もちろん電気、水道はありません。明かりは石油ランプです。また飲み水は井戸もありましたが、街の中央に水の入った大きな水槽があり、山から水が流れていました。冷たくておいしい水でした。それぞれの家庭には水瓶や樽とかが置いてあり、街の水槽から天秤棒を担いで運びました。

暖房は薪ストーブで、ストーブの上にはいつも鉄瓶があり、いつもお湯が沸いており、お茶などはすぐに飲む事ができました。

村に電話は郵便局や役場に何個かありました。街にはお店は一軒ありました。このお店は、現在のスーパーマーケットみたい存在で、何でも売っていました。お米、味噌、醤油、お酒、衣料品、薬、その他日用雑貨なら何でも売っていた。その他に通信販売も行われており、私の父は東京銀座の三越から買ったと話しておりました。

冬になると流氷が来るため、船の往来が出来なくなります。冬には越冬用に生活物資をまとめ買いしていたみたいです。

雪が溶けて春になると山菜がたくさん採れました。北海道と同じで、ギョウジャニンニク、ウド、フキなどの山菜がたくさん採れました。

畑でも様々な野菜も採れました。イモ、ニンジン、ダイコン、ゴボウ、キャベツその他キュウリ、ナス。豆類も採れたそうです。山菜は春になるとギョウジャ、ニンニク、ウド、フキ、ユリの根などがたくさん採れました。

戦争が終った昭和20年9月、のどかで平和だった村に、突然ロシア兵がやって来ました。私たちの住んでいる薬取村にやって来たのは、9月の末と聞いています。その時私は小学1年生で詳しいことは分からないのですが、私の家の向かいには村役場があり、人々の出入りはよく分かりました。しかし、親からは「窓を開けて外を見てはいけない」と言われました。子供だった私は何かあったかなと思いました。しばらくして夕方、外が騒がしかったので、窓から覗いて見ました。その時ロシアの兵隊は踊っていました。一人がアコーディオンを弾き楽しそうに踊っていました。とても陽気な人々だという印象を受けました。

間もなくして、ロシア兵の家族も島へやって来ましたが、住む家がなく、駅通や旅館をロシア兵に没収され、ロシア兵はそこへ住んでいました。それだけでは足りず、日本人の家にロシア人も一緒に住むこともありました。私の家も、家を半分にしてロシア人が一緒に住んでいました。時々、ロシアの女性が家に遊びに来ました。当時、日本人はパンの焼き方を知っている人はいませんでした。パンの焼き方などロシア人から母が教わったり、仲良く暮らしていました。ロシア人がやって来てからは、学校も半分にして使っていました。そのた

め学芸会などは学校では出来ず、お寺の本堂に舞台を造り、歌や踊りや劇などをやりました。

戦争が終わって2年後の昭和22年の8月に引き揚げ命令が下されました。

当時学校は夏休みで、私たちは家に居たので、お友達にもお別れも言えませんでした。

引き揚げるときは小学3年生の8歳でした。引き揚げの通達が来てから慌ただしく荷物をまとめ、引き揚げる者は、皆砂浜に集られました。村人の住民の半分が集められ、残った者は更に1年間ロシア人と一緒に暮らし、翌年の昭和23年に引き揚げました。

引き揚げたときの私の家族は父、母、4人の子どもと、他に夫を亡くした叔母さんお家族8人も一緒に引き揚げたので、30代の父は大変だったと思います。

引き揚げ船に乗る時は、薬取村は択捉島の一番北にあるので最初に乗ることができました。海は遠浅のため大きな船は沖に停泊し、舢舨という小船で乗り降りしなければなりません。この舢舨に荷物と一緒に乗せられた私は、初めて船に乗り、嬉しくなってしまう、船底を見たりしてはしゃいでしまいました。でも大人たちは不安な顔をしていました。

引き揚げ船はロシアの貨物船で、船底から甲板まで人でいっぱい、そのロシアの貨物船は不潔で気持ちが悪かったです。

私たちの船は根室に引き揚げるのではなく、樺太の真岡（まおか）という港に上陸させられました。宿舎となる女学校まで永遠歩かされました。当時小学3年生だった私は大きな荷物を背中に抱え大変辛いものでした。

宿舎となった学校は、9月上旬でもとても寒い日があり、寝むれない夜も度々ありました。

引き揚げのとき荷物の制限もあり、一人30kgまでと聞いています。みんな家の中で一番大事なものをそれぞれ持ってきました。私は家で一番大事な仏様と子どもの下着を持ちました。他の家の人は着物でも綺麗な振り袖のような立派な物だけ持ってきましたが、これらの物は移動の時全て盗まれてしまいました。荷造りの仕方では何が入っているのか、大事な物が入っているのか分かったみたいです。

私の父はアルバム4冊と蓄音機を持ちました。途中、荷物検査があるのですが、この検査で引っかけると全部没収されてしまいます。

ようやく9月中旬、日本の引き揚げ船で函館の港に来ました。ところが、当時函館では赤痢やはしかなどの伝染病が流行っており、当分の間上陸できませんでした。体全体に真っ白なDDTという、粉の殺虫剤をかけられて、船上で一週間くらい過ごし、その後上陸しましたが、みんな栄養失調のような状態で多くの人が亡くなりました。入院しても食べ物も良い薬も無く、亡くなる人が大勢いました。村の村長さんの娘二人も亡くなりました。小学校4・5年生くらいでした。中学生くらいのお兄さんが妹の亡骸を背負って火葬場に行き、火葬してもらったそうです。

一緒に引き揚げて来た人は、それぞれ親戚などの身内を頼って、全国に旅立っていきました。一緒に来た叔母さん家族は身内が居なかったため、国が決めた場所に旅立っていきました。私たちは、根室管内の別海町に行きました。戦後の食糧事情は悪く、引き揚げ者だけでなくみんな貧しかった時代で、品不足で物が手に入らない時代でした。

今の択捉島はロシア人がたくさん住んでおり、雰囲気は大分変わりました。私のふるさと薬取には人は住んでいません。択捉島でも中心の紗那（しゃな）というところには、ロシア人は大勢住んでいます。初めてお墓参りで訪れた20年前は写真撮影も制限されました。また、警備隊も銃を持っているので怖かったですが、今はお墓の草刈りをして待っていてくれたり、カニを茹でてご馳走したりしてくれます。また、島の暮らしは豊かのように住民の服装も綺麗でお洒落になってきました。また、国後島もそうでしたが、島民の多くは日本の中古車に乗っています。乗用車だけでなくトラックなども島で走っています。また、島のお店には品物はたくさん揃っています。幼稚園、学校、病院などは新しく建てられています。港の拡充、道路の拡幅、舗装工事な

どのインフラ整備も進んでいるようです。

今住んでいるロシア人は日本人ともっと仲良くしたいと話していました。

